

春 駒 の 唱

(前唱)

さあさあのりこめはねこめ蚕飼の三吉
のつたらはなすなしつかとかいこめ

(本唱)

春の始めの春駒なんぞ

夢に見てさえ良いとや申す

申してうつすは良女が駒よ

年もよし世もよし蚕飼もあたる

蚕飼にとりては美濃の国の

桑名の郡や小野山里で

とれたる種子はさてよい種子よ

結城蚕たねか茨城たねか

たやで豊原筑前こたね

みとこのたねを寄せや集め

かゆめ女郡衆にお渡し申す

かゆめ女郡衆は受け喜んで

はかまはくなるはつばたなんぞ

手にかえきりりとしたためこんで

左のたもとに三日三夜

右のたもとに三日三夜

河方合わせて六日六夜

六日六夜のその間には

暖め申せばぬくとめ申す

三日に見初めて四日に青む

五日にさらりとおいでの蚕は

おいでがよければはくべき種子は

これより南は吉祥天の

大日如来のお山がござる

お山のふもとにお池がござる

お池の中の弁財天の

ひともとすすきふたもとすすき

三本すすきに住んだる鳥は

鴨の雄鳥大とや申す

キジの雌鳥小とや申す

大と小との風きり羽よ

ふた羽はけば三なる羽よ

ひと羽はけば一千万蚕

ふた羽はけば二千万蚕

三羽四羽とはきましましよならば

紙にもあまれば籠にもあまる

あまり候やひろまり候

さらばこの蚕なにな進上

桑のめぐみが良いとや申す

これより南は八反畑

八反畑はみな桑原よ

このや娘に足駄をはかせ

しまの前掛け紅染めだすき

髪も島田にこりゃんとゆつて

七九目竹のござるをさげて

桑の若葉をお手柔らかに

しんなとたゆめてさらりとこいて

ひとこきこいては小ざるに入れる

ふたこきこいてはお宿へかえる

お宿へ帰れば手でおしもんで

あの蚕にちらりとこの蚕にぱらり

ちらりぱらりと進せてまわる

あの蚕この蚕は桑めすような
物によくよくたとえて見れば

昔源氏の馬屋に住みし

名馬の馬を牧場に上げる

朝日に向いては元そよそよと

夕日に向いてはうらそよそよと

食気にも似たり葉音に似たり

さらばこの蚕休みにかかる

しじの休みはしんじつ蚕

竹に起きてはたかごにまさる

船の休みはふんだん蚕

庭に起きてはにわかには育つ

四度のおきふしなんくせのうて

まぶしがやとて七十五駄

まぶしも小高く織りあげこんで

まぶしに上がりし作りし繭は

利根の河原や片品川の

瀬に住む小石にさもよく似たり

堅さも堅いし重さもおもし

はかりてみよとてはかりてみれば

糸繭千石に織り繭千石

種まゆ共に三千石よ

上州の国では糸ひき上手

尾張の国では繭むき上手

上手上手が寄り集まりて

三日三晩に繭むきあげて

六日六晩に糸くりあげて

七日七夜に綿かけ上げる

機織り上手にお渡し申す

昔たゆまの中將 姫は

綾が上手で錦が上手

雲に架け橋霞に千鳥

梅につぐいす織り込むときは

一反織りたる元三尺を

伊勢の天照大神さまへ

おみすにかけてうら三尺を

ところ神社のおいなり様へ

おみすに上がりし残りし絹は

坂東つづらにしたためこんで

荷物につもれば七十五駄

ところではやるが大八車

大八車にゆらりとつんで

京へやるうか大阪やるうか

大阪本町ほてやが店で

荷物渡して金うけとれば

大判千両に小判が千両

白銀共に三千両

大八車にゆらりとつんで

綾のたづなに錦のたづな

七福神のおてうちかけて

これを館に引き込む時は

いぬいの方に銭蔵七つ

たつみの方に金蔵七つ

合わせて十四の蔵立て並べ

綾の長者に錦の長者

お蚕繁盛とお祝い申す

川場村門前

春駒保存会(平成五年二月)